

メルヴィル『マーディ』のための一つの覚書

——その「語り手」といわれる「逸脱」の章について——

中 村 紘 一

メルヴィルの第三作『マーディ』(Mardi and Voyage Thruher, 1849)は、ノースウェスタン版で六五〇頁余からなり、彼の作品中では最も長いものであるが、M・R・デイヴィスによれば、この作品は三つの部分に分けて考
 えることができるという。すなわち、最初の三十八章を「物語の始まり」、次の二十六章を「ロマンス的幕間」、
 そして、残りの百三十章余を「諷刺的島巡り譚」とする三部分である。物語の内容から見て、この分け方には、
 誰の目にもほとんど異論の余地はないと思われるが、それにしても、この章数から一目瞭然のように、第三部が
 不当なほどに長い。「物語の始まり」と「ロマンス的幕間」の部分を合わせても全体の三部の一にすぎず、残り
 の三分の二が「諷刺的島巡り譚」となる。そして、このことは、この作品に一つの顕著な特徴を与えてもいる。
 その特徴とは、「物語の始まり」と「ロマンス的幕間」において存在していた主人公「語り手が、残りの三分
 の二の部分で、ほとんど姿を消してしまうことである。この物語の始めの三分の一を読み終えた読者は、「島巡
 り譚」の部分に進むに及んで、大きな戸惑いを覚えざるをえない。今まで一人称で自分の物語を語ってきた
 主人公が、急に自分のことを語らなくなり、そういう状態がほとんど最後まで続くからである。それまでの部分

では、主人公の「私」が主役であり、読者の関心は専ら主人公に集中するのに対し、それ以後は、「私」が主役の地位を失って、ほとんどその存在を読者に主張しなくなる。そのために、読者の方は、今までの主人公の「私」は一体どうなったのか、と始めのうちはやきもきして、その存在を探し求めようとするのだが、そのうちに「私」に代る主役たちに氣を奪われてしまうことになる。

最初の「物語の始まり」の部分では、主人公「語り手の「私」が捕鯨船アークチュリオン号を逃亡し、南太平洋を漂流することが語られる。ここで、この「私」の名が明らかにされていないのは、『タイピー』の主人公の場合と同じで、その主人公は後の方になってやっとタイピー部落民から「トンモ」という呼び名が与えられるように、この「私」に「タジ」という呼び名が与えられるのは、次の「ロマンス的幕間」の部分に入ってからのことである。このことを逆に言えば、この部分は、主人公「語り手にはわざわざ名前を名乗らせることなど不必要なほどに、「私」ごとに終始した語りであることを示しているに他ならない。「私」は、逃亡の道連れとしてスカイ島人ジャールを選択し、このジャールと共にかもしか号というボートで漂流を続け、「私」はその最中、パーキ号という幽霊二檣帆船に遭遇し、「私」はそこに住みついていた原地人サモア夫婦を支配下に置くことになる。この部分は、あくまで「私」が中心となる語りである。次のような文章は、その典型であろう。

大虐殺以来始めて、この小型のパーキ号の身繕いが、このようにして行なわれると、われわれはその新しい衣装を風に当てた。すると、パーキ号は、風を孕むよう帆船を見事に定めて、優美に滑り始めた。舵柄を握る正直者の老ジャールが注意深く航路を定める姿は、献身的な老養父のようでもあった。

私は、船長のように彼の傍に立ったり、後甲板を行ったり来たりする時、生まれて始めて、このように航

海中の船を指揮する地位についたことに、少なからぬうぬぼれを感じた。この場合の尋常ならざる状況も、この感情を昂めるだけであつた。——つまり、われわれの居場所が地の果ての荒海であること、それに、私が私の操縦する船の指揮者であると同時に、事実上所有者でもあるという思いにである。^②（二十九章）

言うまでもなく、このような「私」中心の語りは、処女作『タイピー』、次作『オムー』以来の語り口を継承したものである。したがって、確かに、メルヴィル自身は、この部分に書かれているような、航海中の捕鯨船から劇的な脱出をするという経験を、文字通りに積んだことはなかったが（タヒチ島に碇泊中の捕鯨船を脱出するということはあつた）、しかし、『タイピー』、『オムー』が概ね事実に基づく作者「私」の経験談であつたように、この部分の『マードイ』も、特にその語りの特徴から考えると、主人公の経験談が語られるという点で、『タイピー』、『オムー』に類似するものである。

『マードイ』の序文で、著者は、「しばらく前に、太平洋航海の二つの物語を公にした」と述べている。この「二つの物語」とは、もちろん、『タイピー』と『オムー』のことである。しかし、「物語」とは何か。そこで、メルヴィルは、「物語」という言葉で何を意味しているのかを少し考察してみよう。まず、『タイピー』の序文では、

この物語に語られていることがらで、読者には、必ずや異様なこと、あるいは、おそらく全然理解しがたいことと見えるようなことがいくつかあろう。しかし、それらのことは、読者の誰よりも当時の著者にとつてこそ、そう見えたものであつたのだ、著者は、そうした事件をそれらが起こつた通りに述べておいた。後

は、ありのままの真実を語りたいという著者の熱烈な願望が読者の信頼を勝ち得るものと信じつつ、それら

について各自がめいめいの意見をまとめてくださればいいと思う。(傍点筆者)

というコメントがなされる。『オム』にいたっては、まず、そのタイトルからして、すでに「南太平洋における冒険の物語」という副題が付されている。そして、同じく、その序文には、次のようなコメントが付されるのである。

著者は、いかなる点でも、哲学的探求を自負することはない。自分の見聞したことを、親しく、ただ記述したのみである。たとえ、感想が時には述べられることがあっても、それは自然に生まれたものであり、どんな行き当たりばつたりの観察者でも、きつと抱く感想のようなものである。(傍点筆者)

右の二つの引用中傍点の部分は、メルヴィルの「物語」観を端的に表わしているものと考えてよからう。

元来、「物語」という語は、スコットランド法で、契約証書などを作成する際に、その文書の冒頭で行なわれる、事実の説明部を意味するものであったという。したがって、それが文芸用語として使われる時には、「一連の事実、あるいは、出来事を物語ること、その間で何がしかの関係を確立すること」という意味で用いられることとなる。その意味では、『マーディ』の「物語の始まり」の部分とは、その「物語」という言葉がまさしく言う通り、出来事、事実、体験の記述部なのである。しかも、そのうえ、それらの出来事、事実、体験は、すべて記述者(語り手)である「私」に関するものであり、それを「私」が語るといふ、どこまでも「私」中心の事実・経験の世界であったのだ。

もっとも、この「私」と著者メルヴィルとの関係は、厳密に見てみると、両者が必ずしも完全に一致するもの

ではないことは先にも触れた通りである。また、先に挙げた『マーディ』の「序文」からの引用を続ければ、「その二つの物語は、信じられない話として受けとられたので、今度は「つまり、『マーディ』では」、ポリネシアの冒険ロマンスを実際に書いてみようという考えが、私に起こった」とあって、この作品は、全く「ロマンス」であり、「物語」ではないというような発言がされてはいる。が、にもかかわらず、最初の三十八章までは、右に述べてきたように、やはり、「物語の始まり」と見なされるのである。

もっとも、このような「物語の始まり」の部分でも、語り手が、「物語」からはずれてやや例外的な語りの特徴を見せる箇所がある。第三章「王を僚友に」中で、逃避行の道連れジャールを賞讃するために、語り手が見せる雄弁がそれである。

しかし、諸々の英雄、王の末裔であるジャールは、大海における、孤独で、知るべのない水夫であって、海上暮しをするという自分の生まれにただ忠実であるだけだった。このことは、これまででもそうであつてきたし、これからはずつとそうである。ならば、彼がアルフレッド大王の末裔ではないなどといかなる郷土が誓言できるだろうか。彼が老ホメロスの子孫ではないなどといかなるスコラ神学者が誓言できようか。族長ノアは、（神よ、彼を祝福しまえ！）われわれすべての始祖であつたのだ。それゆえ、汝農奴らよ、頭を上げよ。強大な血が汝らの血管には流れているのだ。われわれすべては、血縁に君主や聖人を有する。いや、縁者に天使と大天使を有するのだ。なぜなら、大洪水以前には、主の息子たちは、われわれの母親たちをつまみ、イヴの、厭を言わせぬ娘たちをまさしく娶ったからだ。かくて、すべての子孫は渾然一体となる。根は一つの万物。天上界の諸天使、十二宮中の諸動物、虚空のいたるところをさまよう死者の霊たち、この

世の諸国民に諸民族、諸群団、だれもかれも、本質は兄弟同士である。——ああ、されば、われわれはまことに兄弟なのである。万物は、一なる全体を形成しているにすぎない。宇宙は一つのユダヤ王国、エホバはその元首である。

この饒舌的雄弁は、延々約一頁に及ぶ。この雄弁は、語り手が「私」に関する出来事や体験を述べるというのではなく、どちらかと言えば、語り手自身のお喋りな性癖を自ら露呈していると見られる箇所なのである。

もう一つの例外は、三十二章「^{ジフライグス・ブラウチルス④}ばしょうかじき」と題する章での、語り手の語りの内容である。語り手は、章の始めで、パーキ号が恐ろしい仇敵めかじきの大群に追跡された事を述べた時、次のような本筋から横道に逸れた語りを始める。

さて、ここで申し上げたいのだが、大海を遊泳するごろつき、ほら吹き、暴漢、海賊、威張屋、武装魚、武者、略奪者、刺客、追いはぎ、勇壮な武士、不滅の英雄等すべての中で、インディアンめかじきはこううえなく注目に値するから、この戦士のことを特に記述するために、私はこの一章を捧げたいと思う。そうするにあたり、私は、すべての年代記作者や歴史家たちの、すなわち、ペロポネソスのわが友ツキディデスやその他の人々の例に従うのみである。彼らは、傑出した破壊者たちを記述するために、多くのスペースを割くよう絶えず心を砕いている。むしろ、世間に対して、それを手本にするようにという目的のためである。

この後、この特異なかじきの数々の武勇談（つまり、生熊）がこの章の最後まで列挙されるが、これもまた、「私」の体験に関わる「物語」^{ナラティブ}とは直接関係をもたない。（後の作品『白鯨』に関連して言うならば、この章は、

あの「^{セトリジ}鯨学」の章の雛型ではないか。したがって、ここでも、また、「物語」を語る時の語り手の性格、学識、あるいは、方法意識等がおのずから現われた箇所として、われわれは読むことになる。

しかし、このように、時として、思わず、語り手自身の性癖や学識や方法意識が露呈されることがあっても、総じて、「物語の始まり」の部分では、過去の「私」に関わる事実、出来事、体験が語りの中心であった。

× × × × ×

ところが、次の「ロマンス的幕間」の部分になると、語りは一変する。とは言っても、語りの中心が「私」にあり、「私」に関わることがらが主として語られることに変わりはない。変わるのには、「私」の冒険の内容が、『マードイ』の「序文」の言葉を借りれば、「^{インクレデュリクイ}信じ難いこと」としてしか受け取らざるをえないもの、事実や体験に對しては「^{フィクション}作り話」として呼ばれるところのもの、悪く言えば荒唐無稽、良く言えば想像力の發揮の結果たる「ロマンス」の性向を帯びることとなるのである。そして、この性向を帯びるようになったと思われる要因は、少なくとも三つほど考えられる。

一つは、もちろん、イラーという名の女性の登場である。彼女は、「私」が南太平洋を漂流中に突然出会った金髪白色の乙女であるが、これが、語り手の「私」にとって、「とても信じられない」出来事であったというのなら、われわれ読者にとつてはなおさらのことであろう。まず、語り手「私」は、イラーがカメラに載せられて幽閉されているテントの中に入った時のことを、「私は夢を見ているのだろうか？——雪のように白い肌、大空のように青い眼、豊かな髪、瞬間、私は魔法にかけられたようであった（四十三章）」と語り、さらに次のような語り口を続ける時、これは、もはや単なる事実や経験の限界を超えてしまった世界についての語りであることに、

われわれは気づくのである。

「イラーの語る」話は、とてもこの世のものとは思われなかったので、始めのうち、私は何のことやらほとんど理解できず、この不幸な乙女は、どこかの美しき狂人に違いないと信ずるほどであった。

彼女は、自分はただの人間ではない、すなわち、ポリネシアの楽園のような群島の何処かに存在するといふ歡喜の島オルーリアから来た乙女である、と明言したのである。彼女は、まだ幼な児である時、ある超自然的な力で、生誕の地アスマから、神隠しに会ったようにして、その島に連れて来られたのであった。彼女の名はイラー。そして、オルーリアの川が、彼女のオリブ色の肌を白色に洗い、彼女の髪を金色に染める間もなく、ある日のこと、森を散歩中、彼女は一本の蔓の卷鬚に引っかかったのであった。それは彼女を茂みに引き寄せると、その花の一つにやさしく変身させた。彼女の魂は、意識のあるままに、透明な花卉に包まれていたのだ。(四十三章)

これは、まるで童話・おとぎばなしの世界の語り口である。もともと、このような語り口がされるのは、語り手自身の語り口がイラーの語る話に影響されてそれと渾然となってしまう結果であるとも考えられる。したがって、語り手の「私」は、覚めた眼で、言ってみれば、科学的な眼で、イラーを語ろうとすることもあるにはあった。例えば、四十九章では、「こういったことを説明しようときさまざな方法で努力したあと、私は、この乙女が太平洋の種族の間で、時々ま出くわす白子しらこ(ツルラ)に違いないと想像するようになった」と述べてはいる。しかし、その後でさえ、「私」はイラーに夢中になり、彼女にまつわる超現実的世界を唯唯として受け容れる。いや、むしろ、飲んで積極的に支持しているのである。そして、「物語の始まり」中で見られた、事実や体験を

語る、散文的とも言える語り口は、一変して、幻想的で超自然的で詩的な語り口となるのである。

しかし、日毎に、彼女の呪縛力は、その不思議な力を私の回りに織り込んでいった。そして、彼女の存在にまつわる、すべての隠されたことがらは、ますます甘美で不可思議なものとなっていった。私は妖精と交わっているのだろうか？ 天上の樂園がこの世で突然私を襲ったのだ、そして、イラーはまことに天使であり、それゆえに彼女を聖なるものにして秘蔵が生ずるのだ、と私はしばしば考えた。(六十四章)

第二の要因として考えられることは、先にも触れたように、語り手Ⅱ「私」が「タジ」と呼び名されるようになったことであろう。これが起こったのは、かもしか号でイラーと共に上陸したマーディ群島の住民が、「私」を白タジ、すなわち、彼らの中に神の化身として現われるという半ば聖なる者、職務がらとは言え半神半人に位する者、に見誤ったのを機に、「私」はそれをそのままに肯定してしまったためである。その理由を、そうすれば、マーディ群島でこのうえもない歓待を受けるという実利があつてのことだと言うものの、それにしても、「私」の神様ぶりは仲々堂に入ったものであった。「マーディの民よ、私は太陽から来たのである。今朝、太陽が昇つて、海原に触れた時、私は、その黄金の岸辺から小舟を漕ぎ出し、日射しが水平になる前にここに渡つて来たのである。私はタジである」(五十四章)。

しかも、五十七章「タジは自ら考えてみる」中では、「私」は、タジがマーディ群島で置かれている地位、すなわち、数ある神権の一つにすぎず、しかも決して高位のものではないことを、よく承知していて、「いやしくも傲るようなことはなく、正しい勤めを緩めるようなことはなく、しかし、マーディ諸公国を構成している神々、英雄、高僧、王侯、君子たちの中を、屈託なく打ち解けて率直に、巡回することを決心した」と述べているから

には、「私」はあくまでタジとして生き抜く覚悟であつたことが窺われる。やがて、タジは、實際その通りにして、マーディ諸島を巡行することになるのである。また、イラーと同じく神秘的な女性ではあるがイラーとは正反対の性格を持つホーティアとの関係にあつては、彼はこの二人の女性の間の板挟みになるという神話・ロマンス的存在をも確立しているのである。

第三の要因は、マーディ群島が物語に出現したことであろう。この島々のありようについての詳細は、やがて、第三部「諷刺的島巡り譚」において、十分に語られることになるが、「ロマンス的幕間」ではこの島々に、タジ同様数々の半神半人が存在すること、そして、「この群島の住民にとっては、マーディの地図が世界地図であり、眼に見えぬ無限の彼方にある島々を除き、彼らは自分たちの島々以外のことについては確かな知識を持っていなかった」(五十七章)ということ、この二点に特徴を持つ群島が出現したのを、銘記するにとどめる。そして、このようなマーディ群島出現がまた、「私」(主人公)に関わる事実や体験が中心となる現実世界を超越した、ロマンス的な要素が、物語に導入されたこと意味しているのは明らかであろう。

この「ロマンス的幕間」の部分には、ロマンスを構成するに、もう一つ忘れてはならない仕掛けがあつて、それは、タジの眼前からイラーが姿をくらますことになることである。タジは、悲嘆に暮れ、やがて、彼女を捜索する旅に出る。「とうとう、私はメディアア(群島の一つオドの王)に向かって、オドを出てマーディ群島のあらゆる場所に渡らねばならない、そうすれば、イラーが見つかるかもしれないのだ、と言った」(六十四章)。かくして、「ロマンス的幕間」には、これまたロマンス的なものである「探求の物語」が用意されることになるのである。

ところが、そのすぐ後に、語り手が次のように続けるのは、何とも奇妙なことである。「しかし、これから先

は、彼女「イラー」の運命についての消息が偶然に伝えられるまでは、この乙女について言葉費すことはすまい」と。ここでは、一刻も早くイラーの消息を得たいはずの、登場人物としての「私」の意図と、彼女のことについては語るまいとする、語り手としての「私」の意図との間に、明らかな矛盾が存在するように思われるのである。勘繰れば、「イラー探求」の筋立ては、作者「語り手が仕組んだ一つの方便にすぎないのではないか、したがって、その方便の裏には、別の何かの意図——それほど作為的でないにしても——があるのではないかとも思われてくるのである。

× × × × × ×

第六十五章からは、再三繰り返せば、長い長い「諷刺的島巡り譚」が始まる。この部分は作品全体の三分の二を占めるうえに、それ以前の「物語の始まり」や「ロマンス的幕間」の部分で起こった出来事や筋に言及されることがほとんどないから、この部分に読み進んだわれわれは、『マーディ』という作品の中心はこの第三の部分であるかのような錯覚にとらわれる。また、事実、作者「語り手も、この部分をそのような扱いをしているように思われるふしがある。「物語の始まり」中で、起こったさまざまな出来事、さらには、イラーの足ども、そして、何よりも主人公であったタジまでが、この部分では、ややもすると忘却の淵にあり、われわれの関心の圏外となるよう仕組まれているのである。

おおまかに見て、「諷刺的島巡り譚」の構造は、タジに同行する四人の人物たち、オド島の君主メディアとその老臣下モヒ（マーディ群島における語り部的存在）、哲学者ババランジャ、宮廷歌人ユーミィと、彼らが訪れるおよそ十六の島々から成立する。

右のような人物たちとの同道であつてみれば、当然のことながら、これまでの語りの主体が「私」であつたのが、「われわれ」に移行するのも、この部分での大きな特徴となる。しかも、メデシア王に次のような態度が見られる時、彼ら（「われわれ」）の間に、論談風発が生じたとしても不思議でない。

われわれが海上をどんどん進んで行くと、メデシア王は、一つの社交的とも言える布告をした。彼は、この航海中、格式ばったすべてのこと、儀礼的な作法が中断されることは自分の欲びであると宣言したのだ。一同の自由が妨げられるようなことがあつてはならないのである。この魅力的な計画をいっそう推進するために、彼は、王たることを示す表象を取りはずし、王冠を脱ぎ、笏を捨て、それらを再び手に取ることの決してないことをわれわれに納得させた。……

「今では、われわれはみんな旅の道連れであり、友ではなからうか」と、彼は言った。「だから、みんなそうならうではないか。私は寛ぐ、諸君も同様にしたまえ。」（六十九章）

彼らが実際に訪問する十六の島々に加えて、他に訪問しないまでもその傍を通り過ぎるだけの島々が幾つかあった。それらの島々について、その地理的な特徴、島民の性格、習慣、風俗の特色についての記述・諷刺が、ノースウェスタン版にして約四百五十頁余にわたって延々と続く。先のデイヴィスの言葉によれば、「この旅についての記述は、ユーモアと啓蒙主義が交互に支配する多少とも長く、しかも動きの少ない一連のエピソードによって構成される諷刺的島巡り譚^⑤」ということになる。そして、われわれが、この部分に記述される内容を読んで受ける印象は、良く言えば、多彩、悪く言えば、散漫・雑多である。

例えば、彼らの訪問する二つ目の島の記述については、次のような書き出しで始まる。

われわれの航路は、渦を横切り、今や礁沿いに進み、ジュアンに向かった。ジュアンというのは、このあたりで最も大きな島に与えられた名で、それをとり巻く幾つかの、生い茂った小島も、一括してそう呼ばれていた。これらの島々を一人の君主が支配していた。その名はドンジャロ。ちょうど二十五歳になったばかりで、國中、いや瀉全体でも最も眉目秀麗であった。しかし、彼の端麗さはあまりにも女性的であったので、彼は時にはフーヌー、つまり、女の子と呼ばれることもあった。(七十一章)

この後、老語り部モヒが、古い年代記を繙いて、このジュアンの歴史を語る一章が続く。さらに、君主ドンジャロとの会見記、彼の「午前の宮殿」・「午後の宮殿」の奇習、彼の三十人の妻たちのこと等々、十章余りがジュアン島に関する記述のために費される。

四番目に訪れる島はモンドルドという名の島で、君主の名はボラボルラ。彼は、マーディ群島でも知らぬものはないという生簀^{いす}の持主でもあると言うが、このボラボルラ王の特徴についての記述には、語り手の面目躍如たるものがある。王は訪問者たちに対して歓待の宴を催した。

しかし、友情の途轍もない表現を別にしても、ボラボルラはとび抜けて愉快な人物だった。大酒樽のようなその身体は、雄牛のような彼の心臓を収めるのに、不可欠であった。その身体の下では、瘦せっぽちなど、ひとたまりもなくべちゃんこになる。だが、悲しいかな！ ボラボルラは王冠を戴く身でありながら、メデアやタジと異なり、半神と見なされることがなかった。肥満のために、彼はその名譽からはずされていたのだ。実を言えば、マーディのある地域では、肥満した人間は不死身たりえないと主張する異教人がいたのである。何たる教義！ 犬にでも喰われてしま方がいい考え方である。というのも、肥満人こそ地の塩であ

り、味覚なのだから。上機嫌で、朗らかで、浮き浮きとして、あらゆる類の陽気さに益れている。彼らの呼吸は、大気を浄化し、吐く息は、世界に風を入れる。人間のうちで、彼らこそは立派な量はかりなのだ。縁まで注がれ、積み上げられ、詰め込まれ、重ねられ、溢れんばかりである。テネリフエ島（訳注 アフリカ北西海岸の沖、カナリ諸島の最大島）から出る船のようなもの。吃水は深く、古酒を一杯積み、船倉に降りるには二十段の階段を下らねばならぬ。柔軟で多感だから、何でも簡単に物を頼める。したがって、その円さゆえに、彼らは、痩せて鋭がった顔のならず者に取り巻かれることが実に多い。ああ、腹も財布も肥った伯父こそ、すべての甥たちには飲びと楽しみのものとなるのだ。生涯のうち、どれほどの雄牛の群が、エリー湖の何杯のワインが、彼の大きな碾き臼の間を通り抜けることか、これは哲学者には果てしない考察の主題となろう。肥満人が不滅でないだって！まさしくこの瞬間にも、老ランバート（坂下昇氏の注釈によれば、十七世紀英国の有名な肥太爺だという）は、樂園でその陽気な腹をこすっているのだ。
（九十五章）

十一番目に訪問する島はヴィヴェンザである。この島を考察する場合、一連の他の島々との関係において、なされなければならない。すなわち、ヴィヴェンザ島がアメリカという国のアレゴリであることが明白なのである。同様に、ドミノラ島がイングランドの、ボーフィーローがヨーロッパの、カルリードニがスコットランドの、ヴァダンナがアイルランドの、フランコがフランスのそれぞれアレゴリであることも明白なのである。

ヴィヴェンザ島の海岸にある堡壘には、兜を付けた女神像が見えたという。これは、ヴィヴェンザの守護神だった。

カヌーは接近して行つた。

「おい！ あの碑文字は何だね？」と、メディアが叫んだ。「アーチの上に刻まれたあの文字は？」
しばらくの間、この大きな象形文字を解読していた好古家のモヒは、相変らず眼をその上に注いだままゆっくりと読み始めた。

「この――共和国――では――すべて――の――人間――は――自由――に――して――平等――に――生まれる――なり」

「欺瞞だ！」と、メディアは言つた。

「彼らがそのような状態におれるのもいつまでのことでしょうか？」と、ババランジャ。

「だが、下の方を見たまえ、御老体」と、メディア。

「そっちの隅に二、三文字消されたのがあるようだが――それを解読してもらいたい」

それらの文字は随分細かいものであったから、眼をうんと細めると、碑文解読者モヒは次のように言つた。

――「ただし――ハモ――の――民――は――除く」

「これじゃ前の文言は取り消しということになるではないか」と、メディアは叫んだ。「ああ、汝、共和国の民よ！」

「どうやら後書きとして加えられたようです」と、老人は眼を再び細めて言つた。

「おそらくそうでしょう」と、ババランジャ。「でも、どこかの道化者のいたずらに違いありません」

アーチを矢のように通り過ぎすると、われわれはすぐに岸に着いた。（一五七章）

ハモとはアフリカのことであるようだが、右の状況は、もちろん、リンカーンの奴隷解放宣言が發布される十

余年前の『マーディ』の出版年を基準にしての計算ではあるが、やりとりである。ここでは、アメリカに見られる自由と平等の理想は欺瞞であることが槍玉にあげられているのは言うまでもない。同様にして、独立と共和制を成し遂げて傲れるヴィヴェンザの民に対して、一卷の書物が、——これに「神々からの声」と称される——朗読される時、その「神々の声」は、ヴィヴェンザの標榜する平等や自由という理念自体に、批判を加えていることになる。

一行は、ヴィヴェンザの南部を訪れ、ハモの民が奴隷として働いているのを見れば、彼らの解放が、戦争以外の手段で解決されないだろうかと思案し、また、西海岸でゴールド・ラッシュを目撃すれば、金が必ずしも人々の幸福を生むものでないといった批判を加えるのである。

一行の訪問する十五番目の島の名はセリニアという。

「セリニアですって？」と、バラバンジャは言った。

「どうやら、セリニアとは熱心な信者たちの住んでいる島だということです、陛下。この島では、理性、と啓示されたものが、超自然的な形で統合されていると、マーディ人は言います。彼らの話では、ここでは、アルマは本来の神聖に復帰しており、人々は、——マランマ国（一行が五番目に訪れた偽善的宗教が行なわれている島）で見られた迫害の根拠となったのと同じ起源から自分たちの信仰を演繹しているけれども——平和と慈愛の、やさしい絆で結ばれて共に生きようと努めているとのことですが——愚劣です！ 愚劣なことです！」（一八六章）

『マーディ』の比喻体系では、アルマとはキリストを指すのである。ババランジャは、この宗教的理想の島セリニアを耳にするだけの段階では、右の引用に見られるように、まだこの島については批判的であるが、一行が実際にこの島に上陸して、ここで実施されているさまざまな理念を見聞するに及び、彼はすっかり感心して、ここに永住する決意をすることになる。

以上は、すでに述べたように、一行が訪問したマーディ群島の十六の島のうち四つを例として挙げて、その島の特徴及びその語り口の特徴を垣間見たものにすぎないが、それでも、これらの島々についての語りの間に、何らかの共通する性質らしきものを見つけようとしても無理であることは、一見して明らかであろう。眉目秀麗なドンジャロの支配する島ジュアン、肥満の君主ボラボルラが治めるモンドルド、アメリカ合衆国の比喻であることが明白なヴィヴェンザ、そして、宗教的理想の島セレニア——これらの島々を語るにあたって、語り手の統一した視点のようなものは、まずもって存在しないように思われるのである。ジュアン島とモンドルド島が何かの比喻であるとは到底考えられず、単に物珍しい島として語られているにすぎない。あるいは、せいぜいモンドルド島の場合には、肥満人に対する一般の偏見を語り手が揶揄しているくらいである。また、ヴィヴェンザ、セレニア両島を語る場合、両島が共に比喻とされていることには違いないが、その構造ははっきりと異なる。ヴィヴェンザが、あくまでアメリカ合衆国という実在の比喻であるのに対して、セレニアは、実在しないもの、言い換えれば、ある理想の比喻、つまり、架空のものの比喻なのである。

またもや、語り手の、かくのごとき雑然・不統一、あるいは、多彩な世界の存在は、いったいいかなる理由によるものなのか。

× × × × ×

第三部「諷刺的島巡り譚」では、このようにして、ほとんど全く島巡りの記述に費されるのであるが、その中で極めて例外的に横道に逸れる章が四つある。これらの章をデイヴィスは、「逸脱」と呼んでいるが、^⑥ここでは、物語の語り手は、島巡りの語りを一時停止し、物語の本筋から離れて、「作者」としての顔を見せているのである。

第一の「逸脱」は第七十五章「時と宮殿」と題する章で、これは、ジュアン島を語る幾つかの章の途中、唐突に挿入されている。前の章の最後の文では、一行はドンジャロの有名な宮殿を見物に行つたとあるだけで、この章に入ると、突如として、語り手による次のような議論が展開されるのである。

パーチエス老師（訳注、サミエル・パーチエス、一五七五—一六二六）の『東方巡礼記』や、ハクルート（訳注、リチャード・ハクルート、一五五二—一六〇一）の『航海見聞記』、^⑦テヴノ（訳注、ジャン・ド・テヴノ、一六三三—一六七〇）、ラムジオ（訳注、ジヤム・バチスタ・ラムジオ、一四八五—一五五七）、^⑧イタリヤの編纂者、『探険地誌集』で有名な、ド・ブリ（訳注、テオドル・ド・ブリ、一五二八—一五九八）、^⑨フランソワ・ド・ブリ（訳注、フランソワ・ド・ブリ、一五二八—一五九八）等の見事な二つ折版航海記中に、われわれは、建築に非常に長時間を要したアジアの荘厳な宮殿に関する記述を読むことができる。また、信頼できるガウデンチオ・ディ・ルカ（不詳）は、リビアの彼方の某所で三百六十五柱からなるあの壮大な「暦年宮殿」を建設するに要した時間についての驚くべき記述をしている。その宮殿では、円柱は日象徴し、その回りを同心円をなす区域が接して、それを黄道十二宮を表わす十二の大きな道路が走り、その通路はすべて中心にある太陽天^{サン・ディ}井から放射状に伸びていたとのである。さらに、マルコ・ポーロは、あの幻想的な『東方見聞録』中で、ムガル帝国皇帝（訳注、ムガル帝国は一六六二）が飲宴宮の建設をあまりにも大規模で始めたために、その皇孫が

それを完成するのにいかに苦勞したかをわれわれに伝えているのである。

しかし、これに驚いていても仕方がない。大塔は建設するのに時間を要する。

他のすべてのものについても同じことが言えるのである。

ここに展開されようとしている長々しい議論は、一口で言えば、どうやら、創造物（宮殿）とその創造に要する時間との関係についての議論のようである。立派な永続的創造物の創造には過去の時間がいかに大切であるかを、語り手は述べようとしているかのようである。

右の引用の後、語り手は次のように続ける。

さらに、羽もはえ揃った状態で長く存続するものとは、長い間芽ばえの状態でいたものに違いない。また、存続とは、未来に属するものでなく、過去の性質を有するものなのだ。永遠が永遠であるのは、過去にそうであつてきたからである。新しい堅固な記念碑が今日建設されても、それが永続するのは、その積石が太陽ほど古く永続してきたからである。……永遠のもの一つを作るためには、われわれはそれを永遠の材料で作らねばならない。ゆえに、永続的かつ斬新なものを求めて叫ぶことの空しさ——そして、おまえの花崗岩は古い丘から採つたものだと言つて非難することの愚かさ、が判ろう。なぜなら、われわれは、神々にしてかつ創造者たりうることはないからだ。実際、万物の塑造力自体、鋳型を作る以上のことができるかどうか、論争されてきたところである。全宇宙には、たった一つの根源しかない。太陽すらも、火を求めてその源へ赴かねばならない。また、われわれ火を扱う人間は、われわれの火を求めて太陽へ赴かねばならない。また、その火が手に入つたとしても、ヴェスタ（訳注、ローマ神話で炉の神）の絶えることのない火番のみが、それを絶やさずにお

れるのである。

これは、時間論と創造論の奇妙な混淆である。ここの論旨は必ずしも明快ではないが、それをあえてまとめてみるなら、斬新かつ永続的といったものはこの世には存在しない、なぜなら、永続的であるということは過去にそうであつたからである、また、その意味では、真に独創的なものとは、この宇宙にはたった一つしか存在しないものである、ということになる。こういう論を展開する語り手の意図とは、いったい何なのであろうか。単に論を弄んでいるのか。それとも、語り手＝作者は、この作品のためのアポロギアを述べようとしてもしているのか。

この後には、いわゆる「ローマは一日にして成らず」、すなわち、あらゆるものの創造には時間がかかることを例証するために、さまざまな建造物のカタログが続く。その建造物の名は、ネロの「金の館」、メキシコの「太陽館」等々、数にして三十余り、東西古今のそれが列挙される。あげくには、人間さえも生まれ落ちるのに数カ月を要する、などという一見ふざけた例も挙げられる。

このパラグラフの締め括りは、「時間は、」物質的な宇宙が暗黒時代を送っていた時にも存在し、えも言われぬ沈黙が、想像もできぬ遠隔から、その宇宙を大海の小島のように見なした時にも、存在していたに遠くない」と、述べる。そして、その後に続く文は、次のようになる。

このようにして、翼をつけた魂は、「時」の果てしないトンネルを深く深く遡るにつれて、夜鷹のごとく飛び廻り、前後に永遠を見出す。極限に達したかに見えたものは、果てしない始まりにすぎない。

しかし、広大な洪水の球体に派遣されれば、ノアの鳩でさえ、戻ってきて、彼の手に休んだのだ。同じよ

うに、わが魂も、私のもとに帰り、その翼を折りたたむ。

かくのごとく、それゆえ、「時」は、最も強力なアラリック王（訳註、約三七〇―四一〇、西ゴート族の王で四一〇年ローマを占領した）であるとしても、

また最も強力な石工でもあるのだ。さらに、教師、顧問、医者、書記、詩人、賢人、王でもあるのだ。

そう、「時」は、いずれ判る時が来るが、庭師でもあるのだ。

以上が、第一の「逸脱」の要約であるが、語り手の魂が無限の時間の中を飛翔しているらしいということは判つても、これをもつて直ちに、語り手＝作者の創作上のアポロギアと読むのは無理なようである。もっとも、その判断は、第二の「逸脱」を考察してから、すべきなのかもしれない。

「信仰と知識」と題する第九十七章が第二の「逸脱」である。この「逸脱」もまた、前章でサモアがとても信じられない話を語ろうとしたのをきっかけに、突如、行なわれている。書き出しは、こう始まる。

ある信じ難いことが、語られようとしている。しかし、あることが、たとえ信じ難くとも、それでも真実であるということはあるものだ。時には、それが真実だから信じ難いのである。そして、多くの不信の者は、最も信じ難くはないはずのものを単に信じないのである。また、多くの偏狭な信者は、最も明白なものを拒絶する。……

このようにして、この章は、「真実」と「信ずる」ということの間に存在する関係についての議論を始めるが、信じ難いものが真実でありうるという主張には、語り手＝作者の主張として、創作上の秘密が語られているようでもあり、相当意味ありげに思われる。同様に、次のような言葉が続く。

知性が高くなればなるほど、信仰心はより多くなり、輕信は少なくなる。ガブリエルは、われわれよりも拒絶することが多いが、信仰心においては、われわれすべてに勝る。最も不思議なことが一番の眞実である。しかるに、一番の眞実とは、われわれの最も到達困難な眞実なのである。最も身近かなものが、最も遠いのである。耳は脳のすぐ傍にあるのに、それを見ることは永遠にできない。人類は、月に関して、月にいる人間よりもっと幅広い理解の仕方をしている。われわれには、月が球形をしていることが判っているが、彼はそれを推量するにすぎない。われわれに自分自身のことと判らないのは、われわれが自分自身の中にいるからである。われわれが徹底して不信の徒でないというのは、われわれの安易な信仰心を示すにすぎず、われわれが自分の信ずるものを信じているというのは、われわれの信仰心の欠如を示すにすぎない。

ここまでの議論の展開は、逆説的であつても一応論理的であり説得的であるように思われる。つまり、それは、われわれの常識の虚を衝いたものでありながら、あるいは、そうであるからこそ、われわれには首肯できるものなのである。ところが、次の節になると、議論は突飛とも言えるぐらい飛躍する。

全世界的な、古い、眞実については、人類は不信の徒である。君は三千年前に生きていたことを信ずるか？ テュロス（訳注、古代フェニキアの港市、古代の大都會の一つで航海者と貿易業者の活躍の中心）の占領を目撃し、ゴモラ（訳注、市民の邪惡のために、ソドムと共に神に滅ぼされた古代都市）で途方に暮れたのを？ 信じまい。しかし、私について言えば、私は、ノアの洪水がおさまった時に立ち会い、地面を拭い、最初の家の建設を手伝ったのだ。私は、荒野にヘブライ人と一緒にあつた時には、氣息奄奄であつたし、また、ソロモンが居並ぶ士師たちを負かした時には、法廷にいたのだ。後世に明らかにすべきでない秘儀や、正典とは相容れぬ事柄を収めているために、マネトー（訳注、紀元前二五〇年頃エジプト、ヘリオポリスの神官、エジプト史を書いた）のエジプト史を

禁書にしたのは、私だった。私が、殺し屋皇帝ドミティアヌス(訳注、五一―九六、ローマ皇帝(後年) 残虐な行為が多くついに暗殺された)に対する暗殺の陰謀を企てたのだ。私が、有徳のアウレリアヌス(訳注、二二―二九、一三) 七五、ローマ皇帝は皇帝になるべきだと元老院に動議を提出したのだ。私は、ディオクレティアヌス(訳注、二四五―三二二、ローマ、皇帝、キリスト教徒を迫害した)、それに、カルル五世(訳注、神聖ローマ皇帝 一五一九―一五六)の退位を唆した。私は、イザベラ(訳注、イザベラ一世、一四五一―一五〇四、スペインを統一、コロンブスの後援者)の心を動かし、コロンブスの話に耳を傾けさせたのだ。私が、勅許状を、王の寵臣に見つからぬようハートフォードの樫の木に隠した(訳注、コネチカット勅許状は、エドマンド・アサートが要求した時、樫の木に隠されていたという、一六八七)。張本人なのだ。私は、ゴッフとウォーリ(訳注、ゴッフ、一六〇五―一六七九、彼はウォーリの女婦、二人はともにチャールズ二世に対する死刑執行令状に署名した)。王政復古後はともにニニを匿った。私はモーホーク族仮装団の指導者となり、マサチューセッツ港で東インド会社の紅茶を海に投げ込んだのだ(訳注、いわゆるボストン茶事件一七七三年のことで、事件を起したボストン市民はモーホーク族インディアンの扮装をした)。私は、ヴェールを付けたペルシアの予言者(不詳)、私は、鉄仮面(訳注、ルイ十四世時代に黒いローブの覆面をかぶせられて、二人はともにチャールズ二世に対する死刑執行令状に署名した)。私は、ジュニアス(訳注、一七六九―一七二とその政策に対する公開非難状を発表した匿名人物、今で)。私は、ジュニアス(年間の英蘭の高官たちは一般にフリップ・フランシスであろうと言われている)。

九十七章は、こうして唐突に終る。ここでの「私は……である」(あるいは、その変形)という表現は、言うまでもなく、すべて比喩的である。すなわち、語り手は、右に列挙された歴史上不可思議な事件をすべて信ずるということの比喩として、こういう表現を用いているにすぎない。しかしながら、すぎない、とは言うもの、やはり、「私は……である」という表現の文字通りの意味にも、われわれは抱泥せずにはおれない。語り手の魂は、これら東西古今の不可思議な事件に関与した人物たちに移っている、あるいは、その人物たちを吸収している、と考えたくなるのである。

そして、第一の「逸脱」における時間論と創造論、さらに、この第二の「逸脱」における信仰論を併せて、こ

れらを語り手のロマンス作家としてのアポロギアとして読む、あるいは、少なくとも、ロマンス作家としての成長の傾斜をここに見る、ことはできないものだろうかという誘惑にとらわれるのである。

第三の「逸脱」は、第一一九章「夢」と題する章である。その書き出しは次のようになる。

夢！ 夢！ 黄金の夢、黄金色をなし、果てしなく、あたかもそれは、ダナエ（訳注、ギリシヤ神話、アルゴス王アクリシオスは娘ダナエの身を守るために青銅の塔に閉じこめたが、ゼウスが黄金の驟雨に身を寄せてダナエの膝に流れ入り、彼女と交わった）の驟雨を織り込むというリオ・サクラメント（訳注、カリフォルニア州北部から南流してサンフランシスコ湾に注ぐ川）からはるかに拡がり、花咲き乱れる、大草原のごとし。……草を喰い続けて地平線に至り、世界を廻る、野牛のごとく、私の夢に、群がる。その中で、私は、それらが全部逃げてしまわぬうちに、一頭を仕留めようと、槍を持ち突進する。

夢！ 夢！ 東洋の帝国のごとく、歴史を往きつ戻りつする。——多くの筋が幾重にも揺れ、パノックバーンの戦いでのブルース軍の槍（訳注、ロバート・ザ・ブルース、すなわち、スコットランド王ロバート一世、一三〇六―一二九、イングランド王に反抗して、一旦は亡命したが、一三十四年のパノックバーンの戦いでイングランド王に勝ち、スコットランドの独立を獲得した）のごとし。王冠は豊かで、六月に咲く金盞花のごとし。……私の回りには、大きな大洋が押し寄せるがごとく、アマゾンやオリノコ（訳注、南米北部の川、長さ二、五七五キロメートル）の河がうねる。波は、騎上のパルティア人のごとく、前や後に、広い森林地帯を投げ捨てる。全世界が大鹿で、森は枝角である。

ここでの夢とは、語り手の想像力の世界のことを言っている、と解してよからう。その想像力の世界は、果てしない拡がりを見せて、全世界を覆う。さらに、右の引用に繰り拡げられる世界が、どちらかと言えば、平面的なものであると考えられるならば、次の引用に見られるその拡がりは立体・空間的なものとなる。

しかし、赤道下、私の足元では、地球は、戦士の心臓のように、鼓動し脈打つ。ついには、その地球が自分自身ではない、ということも私には判らなくなる。さらに、私の魂は、深海に沈むかと思えば、天空高く舞い上がりもする。私の魂は、流星のごとく、かくも果てしない天空を揺れ進むため、すべての星が自分の親族であるかに私には思われてくる。私は、星に向かって、定められた軌道にとどまれと呼びかける。が、私は、大型帆船数十隻を曳航する巨大三層艦のごとく、喘ぎ、緊張し、進行の妨げとなる太綱を解き放ちたくなる。

語り手の想像力が拡大するこのようなイメージに対して、以下は、それが豊饒・充満することが述べられる。

そして、フリゲート艦のごとく、私は何千もの魂に満ち溢れている。

そうなんだ、数限りない魂が私の内なるところに宿されているのだ。

そして、これは、次のようなカタログとして記される時、圧巻である。

私の内なるところでは、多くの名士たちが、横になって話を交わす。聖パウロがモンテーニュの懐疑に反駁し、背教者ユリアヌスがアウグステイヌスを反対尋問し、トマス・ア・ケンピス(訳注、一三八〇—一四七二、ドイツの神秘家・著述家『キリストのまねび』)が亀の子文字の文書を繙き、みなに謎を解けと言う。ゼノン(訳注、キプロスのゼノンと思われる。前三三六—前二六四、ギリシヤの哲学者、ストア学派の祖)が、デモクリトス(訳注、前四六〇—前三七〇、ギリシヤの哲学者『笑う哲学者』の異名をもつ)の嘆れた叫びの陰で、格率を咭く、デモクリトスは大声でいつまでも笑い続け、ピュロン(訳注、前三六五—前二七五、ギリシヤの哲学者・懐疑論者)の冷笑が見えるけれども、神聖プラトン、プロクロス(訳注、四

四八五ギリ）、ヴェルラム男爵（（訳注、フランシス・バーコン））は、私の相談相手なのである。さらに、ゾロアスター（（訳注、紀元前六〇〇年頃のペルシャ））は、私が生まれる以前から、私に囁きかけているのである。私は、私の世界を踏破し、マンゴウ・パーク（（訳注、一七七一―一八一六、スコツ））がアフリカの小屋で体を休めたように、多くの諸国を訪れる。私は、バヤジド（（訳注、オスマン帝国のスルタン、一六一三―一六〇二、一四〇二―一四四七、一五二二））のごとく、仕えられ、酒神バックスが私の執事、ウエルギリウスが私の吟遊詩人、サー・フィリップ・シドニーが私の小姓となる。私の記憶は、誕生以前の生に及ぶかと思えば、また、ヴァティカン宮殿の私の図書館でもある。その壁龕は、無限の展望を持ち、中世風の出窓から差し込む交差光で暮色に染まる。

このカタログの後には、次のような類推が駆使される。

そして、偉大なるミシシッピ河が、水辺の諸民族を集め、オハイオ河が、盟約のある水流をすべて伴い、ミズリー河が、高地の諸部族を激流の中に落とし込み、アーカンソー河が、平原の韃靼人のような川を集めるように、――過去と現在のすべてが私の中に流れ込み、私は、はるか遠くから大波を渦巻かせるのである。

このような豊饒な、いや過剰とも言うべき想像力に取り憑かれた語り手は、それをいかにして紙に書きつけるべきか途方に暮れる。過剰な想像力を有した精神は、作家が行なわなければならない表現という拘束力を嘆く。そして、語り手は、通常の表現方法ではとても御しきれないほどの想像力に押し潰されそうになる自分の姿を、書き連ねる。

これを書いている今、私の頬は蒼白になる。私は、私のペンの音にびくつとする。私自身の生んだ、驚の

ような狂気が、私をむさぼり喰う。私は、このような大胆・奔放を取り消すことができたかどうか、どうれしいことか。だが、鉄の帷子をはめた手は、私を万力で締めつけ、私の意志など無視して、一文字一文字を書き連ねる。私は、私に跨るディオニソスを振り落とすことができたかどうか、どうれしいことか。私の思念は、私を押し潰し、私は呻き声をあげる。私がこの独居室で、奴隷のようにあくせく働き失神する間にも、はるかな野には、収穫者のうたう歌が聞こえてくる。熱が私の体を溶岩のように駆けめぐる。私の熱き脳は石炭のように燃える。野の作男に較べれば、私も多くの君主に似て、ちっとも羨むべき存在ではないのだ。

第四の「逸脱」も、「島巡り譚」がいよいよ佳境に差しかった頃、突如として、行なわれる。第一六九章「航海を続けて」の書き出しは、今まで通りの島巡り譚の語り口である。「今までと同じく、穏かな青い海に朝が来た。」これは、マーディ群島の航海継続を物語る文である。そして、次の文では、マーディ群島は、天体のする座に喩えられたりする。が、さらにそれに続く文では、語り手が、突然、一人称としてその顔を出してくるのである。

そして、太陽が、神聖なる力によって、巨蟹宮、獅子宮、双魚宮、宝瓶宮を縫って黄道を廻るように、私は、ある神秘の衝動によって動かされ、白い珊瑚のマーディ海域の群島の間をこんなふうに速かに前進する。

ここでの「私」は、登場人物としての「私」であるのか、語り手としての「私」であるのか、曖昧となっている。登場人物としての「私」ならば、なぜここで突然「私」となるのか。他の人物たちと行動を別にしたわけではないのだから、なぜ今までのように「われわれ」であってはいけないのか。現に数行前では、「われわれが通

り過ぎて行った島影は……視界から消えた」と、複数の一人称で語られているのである。そこで、ここ「私」は、この物語の語り手としての機能を持つ「私」が強く意識された結果の「私」であると考えたくなる。が、そうすると、「白い珊瑚のマーディ海域」というイメージなども、実際の地理的マーディ海域というよりも、創作上における何かの比喻、例えば、非現実的・ロマンス的世界の比喻であって、そこへのめり込んで行く語り手の姿を右のような文で表わしたのだと考えなければならなくなる。しかし、それにしては、この文における現実的世界、つまり、現実的マーディの世界のイメージも、まだまだ強力であるように思われるのである。ここでの「私」は、どうやら、登場人物としてのそれと語り手としてのそれとの両方の要素を兼備した「私」として考えるより仕方がないのである。

ところが、次の文で、「ああ、読者よ」と呼びかける時の「私」は、明らかに語り手としての「私」であると思われる。

ああ、読者よ、聞きたまえ！ 私は海図をもたずに航海してきているのだ。われわれは、羅針盤と測鉛で、これらのマーディ群島を発見したのではなかった。大胆に船出する者は、いっさいの太索を解き、すべての者に順風であるような常なる風には背を向けて、自分の息で自分自身の帆を満たす。海岸に沿って航行している限り、新発見はない。「陸が見えたぞ」と、ついに叫ばれるのは新世界の探求が行なわれた時なのだ。

その航海者は、前人未踏の海に自らの船を操ったのだ。嘲笑の中、彼は自分自身の道を耕したのだ。自分は大胆すぎるだけではないのか、陸なき所を探ろうとしているだけではないのかという思念で、彼の心は沈むことがしばしばであったけれども。

私がそうなのである。

まず、「ああ、読者よ、聞きたまえ！」と呼びかける主体は、これは当然のことながら、物語を語る者としての語り手であろう。その次の「私は海図をもたずに航海してきている」(I've charless voyaged)の文中の「航海」とは、この物語が航海物語であるために紛らわしいが、ここでは、物語を語ることの比喩的な表現であると考えたい。この文の時制が、過去時制でなく、現在完了時制であることは、それが、過去の出来事を語る時制ではないこと、そうではなくて、語り手の語り口が今ここに継続されてきていることを表わしていると解せられるのである。したがって、この文の意味は、語り手の「私」は、この物語を「海図をもたずに」語り続けてきた、ということになる。もちろん、ここで「海図をもたずに」が依然として、比喩的であることに変わりない。

そこで、次にこの「海図をもたずに」という比喩表現の意味が問題になるが、これは二つの意味に解せられよう。一つは、物語を語るにあたって、語り手には、初めから終りまで首尾一貫した計画的な構想があって語ってきたのではないという意味。もう一つは、自分の語っている(語ってきた)ことがらは、海図もないようなところに存在するもの、つまり、誰も語ったことのないもの、あるいは、海図では発見できないもの、つまり、現実世界には存在しないものであるという意味である。

次に来る文は「われわれは、羅針盤と測鉛で、これらのマードイ群島を発見したのではなかった」(With compass and the lead, we had not found these Mardian Isles.)と、過去完了時制で書かれているから、この「われわれ」とは、島巡りをしている登場人物たちと、一応考えることもできる。しかし、前の文の文脈から考えると、「われわれ」とは、語り手と聴き手(読者)を意味しているとも、考えたくなるのである。すると、

「マーディ群島」の意味も、登場人物たちが航海している地理的な群島ではなく、語り手がマーディ群島に託して語ろうとしたところのもの、ということになる。

それは、その後の文によれば、「新世界」という言葉で意味されているところのものであろう。因みに、この文で、主語は、「私」でも「われわれ」でもない、つまり、物語に直接関係のない、「大胆に船出する者」（「航海者」）という一般化された三人称になっているのは、この場合、この文が比喩的な表現であることをいっそう感じさせるし、またそう考えざるをえないのである。さらに、ここでの「航海者」は、「前人未踏の海に」出て「新世界」を発見する者ということである。そして、その後の文が「私がそうである」と続けると、ここに、「語り手」（「私」）＝「大胆に船出する航海者」＝「新世界発見者」という図式が成立することになる。その結果、この図式から得る結論は、「語り手」は「首尾一貫した計画的構想を持たず」に、ただひたすら「前人未踏（前代未聞）のこと」を「語ってきている」ということになる。

さらに続く二節は、語り手が、このような地理的・物理的には存在しえない前人未踏（前代未聞）のことがらを、初めは気楽な気持で語り始めたが、やがて暗中模索の状態で語り続けねばならなくなった時の苦悩・困難と、それがもしも成就されたならばその時の栄光を比喩的に表現したものであろう。

そして、私は、ただ陽気な気持で、航海を始めてみたら、抗い難い突風のために航路からはずれてしまつたうえ、準備不足や、若さや、成人前に受けるさまざまな攻撃のために頭を下げながらも、依然として強風に向かつて飛び続けねばならない——それでも、私は努めて心を雄々しく保ってきたのである。

そして、現在われわれの海上にはしばしば何万という船が航海していて、新しい国を発見することがこれ

までになく困難であるとするなら——それだけいっそうその栄光は大きいものであろう。

最後に、語り手が、「マードイ群島」と言い、「新世界」と言って、語ろうとしたところの「前人未踏（前代未聞）」のこととは、何であつたのか？

しかし、ここに探求されているこの新しい世界とは、パロス（訳註、スペイン南西部の旧海港、コロンブスの西方航海の出発港）から先頭部隊を繰り出した人が探求した世界よりも、はるかに不思議なものなのだ。それは、精神の世界なのだ。ここでは、旅人は、アステカの地をさまよつたバルボア（訳註、一四七五—一五一七、スペインの探検家で太平洋の発見者）の一団よりも、もっと驚異の眼で、回りを見つめるかもしれないのだ。

「精神の世界」——これこそ、この語り手がこの物語の中で語ろうとしたことなのである。これこそが、「ロマンス」と呼ばれるものが扱うものであり、そして、『マードイ』という作品がそうであるところのものなのだと言えよう。もっとも、ここでは、その「精神の世界」とは具体的に何なのかは、説明されてはいない。ともかく、『マードイ』とは、「精神の世界」——それは地理上のマードイを超えたものである——を追求した作品であり、また語り手の語る目標はそこにあつたと言えよう。

しかし、憶れてやまないこの追求が決して容易でないことを、語り手は十分承知しているように察せられる。それを追求する（語る）苦闘は破滅に至るのではないかと、語り手は予感しながらも、どうしてもそこへ乗り出さなければならぬのである。

しかし、熱狂的な憧れは、幻の未来を生み出し、これを現在のことであるかのように考えてしまふ。それゆえ、かりにこれら恐れに満ち、気が遠くなるような恍惚が去った後、その判決が、黄金の港には到達できない、ということであっても、——その大胆な追求において、卑俗な岸辺を漂うことよりも果てしない海に沈むことの方がいいのだ。そこで、神々よ、私が難破するなら、全き難破を与えたまえ。

第四番目の「逸脱」の章は、このようにして、語り手の悲痛とも言える叫びと共に、結ばれているのである。しかし、語り手の追求は決してまだ挫折したわけではない。

注

- ① Cf. Merrell R. Davis, *Melville's Mardi: A Chartless Voyage* (Yale University Press: New Haven, 1952).
- ② Herman Melville, *Mardi and A Voyage Thither* (The Northwestern-Newberry Edition: Chicago, 1970), p. 97. 以下『マーディ』からの引用はすべてこの版による。
- ③ Cf. Roger Fowler ed., *A Dictionary of Modern Critical Terms* (Routledge: London, 1973).
- ④ 原題は“Xiphias Platypterus”。この標準と名がバシヨウカジキであることは、京都大学西村三郎教授の御教示による。それにしても、同教授の御指摘もあったが、右のラテン語の綴りはおかしい。Xiphias Platypterus となるべきところ。
- ⑤ Merrell R. Davis, p. 142.
- ⑥ *Ibid.*, p. 149.
- ⑦ 原文には“Dionysius”であるが、“Dionysus”に解するよりほかない。

訂正

『英文学評論』前号（第四十五集）の拙論中、五十六頁に散見する「ヘギラ」という言葉を「ヘジラ」に、そして、同頁六行目で「原住民の言葉である」というのを「アラビア語の」に訂正する。御指摘いただいた方にお礼を申し上げるとともに、筆者の不明を恥じる。論旨の大勢に影響がなかったのがせめての幸いである。